
やっちゃったよ。私...妖怪みたいなのを拾いました。

荒城 十晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やつちまつたよ。私…妖怪みたいなのを拾いました。

【Nコード】

N4204Z

【作者名】

荒城 十晴

【あらすじ】

恋人に振られてやけ酒を浴びての帰り道に子犬を見つけて連れ帰ったのが運の尽き。「てめえら、とつと家から出てけ！！塩撒くぞ！妖怪共お〜！」

やっぱり王道！！美形な妖怪が住み着いた！？

「ちなみに俺は犬神なんですが？」

主人公はこのまま三年行けば、処女のままアラサー突入！重度の音ゲーマニア。

「きさまらのせいで私がポップンやダンレボ、初音出来ねえだろう

「が！私の音ゲーライフ返せえ！」

運命の出会い…ケツ（前書き）

はいはい〜やりました。また新連載やり始めました。詳しい人物紹介はあとがきにてやります。

メアンリや永井さんも進んでないけどよろしくね！

運命の出会い…ケッ

「はあ、…どうせだったら処女貰ってから別れて欲しかったな…」
私、葛之葉 明日香（くずのは あすか）27歳独身OLの処女だ。

4時間前に2年前から付き合っていた男性に振られた。
社内恋愛だった。

「しっかし、やってくれるわねー。あの、ぶりっこ後輩ちゃん」

『せえんぱあい、わたしたちい、つきあうことにい、なりましたあ（はーと）』

『そうゆうことなんだ、別れてくれないか…』

私は、『…そう、いいのよ。…貴方達お似合いだから…』

「オニアイ、ねえ。はっ」

振られた後は居酒屋でがばがばとビールとつまみを飲み食いした。
今はその帰りだ。

『別れてくれないか…』

「もういいや…今夜は朝まで音ゲーするぞー!!」

今はまっているのは、長い緑髪のツインテールの女の子のゲーム。

「ロミオとシンデラでもクリアするか」

いい感じに酔っている私に見えたのはボロボロの布にくるまった何かだった。

「ん？なんだあれ？」

近付くとそれは子犬だった。

酷く衰弱していて汚れきっている。

普段の私なら見捨てるか、餌だけやってうせるかだけど……

「……………」

私はその子犬を拾った。

ただ、自分と似ていたから。

そんな理由だけだった。

鳴き声すら出さない子犬が酷く似ていたから…

「いつの世も厳しいもんだねえ。」

一人言をポツリと呟いて帰る。

ガチャッ

ただいま、と心の中で言う。

「さて、牛乳あったかな？」

しばらくして、人肌に温めた牛乳を子犬に飲ませます。

舌を出して器用に飲む。

「フフツ、おいしいか？」

明日には、飼育用グッズを買って来よう。

風呂にでも入るか…

子犬は牛乳を飲み終えてうとうとしている。

私は子犬を抱えて風呂に行く。

子犬は先に入れて、服を脱ぐ。

「いい歳してまだ処女なんて笑い物ね」

風呂に入ると子犬は嫌がって逃げようとした。

「こら、逃げるんじゃない！」

子犬を捕まえて湯を張った桶に入れてやる。

ヒンヒン鳴いているが止めない。

子犬の体をボディソープで揉みながら洗う。ちなみに私はハーブ系が好きだ。

前に見つけた柑橘系とミントがいい感じに混ぜた匂いのソープで洗う。

子犬が、フワンと変な声で鳴く。

汚れが落ちていき毛色が分かる。

クリーム色だ。目は……赤だ。

「…おまえ、アルビノか？」

子犬が固まる…が、ぎこちなく首を曲げ、「クウン？」と鳴くので笑ってしまった。

まるでこちらの言葉を理解しているようだ。

しかもアルビノは毛色が白になるはずなのでそういう犬種なんだろう。

私は余り犬種について詳しくない。目の色が青いのがいたし。いるんだろう。

風呂から上がり拭いてやる。

さて、風呂上がったし、寝るか。

布団を敷いていると、子犬は少し離れてこちらを見ている。

「今日くらい一緒に寝てもいいぞ」

尻尾を振りながらもおすおすと寄って来る。

「本当に面白いな、君は本当に犬か？」

子犬はワンと一鳴きする。

さて、明日はペットショップに行ってグッズを買いに行こうか。

【明日香 side 終わり】

【???? side より】

「この間の答えを聞きたいんだが？」

「俺は断らせてもらう！」

紺色の甚平を着た、赤い目をした青年が言う。

「おやあ？君にとって悪く無い条件だと思っただけど」

黒いスーツを着た18歳位の青年がニタリと笑う。

「俺は関係ないな！とつとと出てけ！」

「本当にか？人間を恨んでないのか？」

「それはっ…！」

「望んでいないのに寂れた村を復興するために、お前は生き埋めに

され、頭だけ出されてそのまま一週間、飢えに苦しませられ目の前に餌が有りながらも食えず過ごした一週間かけて飯の事だけが頭ん中占めた時、お前は殺されてんだよ？ 挙げ句、昔は祭られていたのに今はこんなボロい社やしうにお前はいる！」

スーツを着た青年は憎む、憤怒する。人間を。

「そうしなければ、この村は皆死に絶えたはずだ……！！！」

甚平を着た青年は苦々しく言った。

「奇麗事はもういい！！ 単刀直入に言え」

「俺は…嫌だ…」

「そうか…お前がいれば結構な戦力になってたんだかな。 犬神…俺はもう帰るよ」

スーツを着た青年が踵を返す。

「そうか…次来た時は茶位出す……があっ！！！」

甚平を着た青年の胸には刀が刺さっていた。

「済まないねえ、聞かれたからには口封じする事にしてるんだ、とはいえお前に真正面から行っても勝てっこないんで不意打ちさせて貰った」

「がっ…はあ…はあ」

甚平を着た青年は地面に膝を付きスーツを着た青年を見る。

「それじゃあな」
刀を振り上げる。

その瞬間、甚平を着た青年は地面の砂をスーツを着た青年の顔目掛け投げつける。

「っ！！目潰しか！！」

甚平を着た青年はその間に駆ける。

駆ける。駆ける。駆ける。駆ける。草木を避けて、駆ける。

疲れた頃にはボロボロになり立っていられないほどだった。
ここがどこかも分からない。

「そろそろ人化の術が解けるな……」

ぽつりと呟やく。

その2時間後、彼は一人の女に出逢い、拾われるのだが、それは先の事である。

【?????side 終わり】

運命の出会い…ケツ（後書き）

人物紹介1、

葛之葉 明日香（27）

9月12日生まれ

O型

趣味、音ゲー 中でもダンレボが特に好き。

性格、面倒くさがりの面倒見のいい姉御肌。気に入ったのにはよく面倒を見てやる。

紹介文

恋人に振られてやけ酒煽りながらの帰り道に子犬（妖怪）を連れ帰り、そこから妖怪の事情巻き込まれる。一見、妖怪から見れば弱そうだが、音ゲーで鍛え上げた運動能力や咄嗟の判断、反射神経は桁外れもいいところ。

なんか妖怪に好かれる。

最後に一言

「私の音ゲーライフ返せや。バカ妖怪共」

超絶！？人VS鬼！！…まじですか…（前書き）

結構グロくなっちゃいました。誤字誤文があってもご容赦を、あとなんか感想頂けると次に生かれますし、書く意欲が増します。よろしくね。

超絶！？人VS鬼！！…まじですか…

【????side】

「やってくれたな。…あの犬…」

めをこすりながらスーツを着た青年は呟く。

「へえ〜。旦那でも失敗することがあるんすね〜…」

青年の近くの木の上にパーカーを着た少年が聞こえる用に独り言を言う。

「見てたらあいつを追えよ」

「いや〜、俺じゃ犬神の旦那にや追いつけませんよ」

「取り押さえる位は出来たと思うんだけど？」

「だから無理ですって、力、速さ、体力、俺が相手になるのは精々力と防御が関の山ですね」

「そっか…」

「旦那だったら妖術の幻惑で迷わせること位出来たでしょうに」

「無理だよ。あいつは鼻が利く」

「あー、犬ですもんね〜」

パーカーの少年が頬を掻く。

「追え」

「あいあい、りょーかいしましたよつと」

パーカーの少年が木の枝を蹴ると空高く飛んだ。

パーカーを着た少年。彼は鬼。その22時間後、彼は一人の独女、明日香と激闘を繰り広げる事になる。

【????? side】終わり

所変わり明日香side、「いや〜、フルーツジュースが安く買えたな〜」

会社の昼休み、私はスーパーの勝利品を見ていた。

スーパーと言う名の戦場から奪い合いを制したそれは正に戦利品。

ちなみに買ったのは、桃率100%桃絞りジュース、イカのスルメ、無味無色の炭酸水、お昼の弁当。

子犬は餌と水、風呂場にトイレを置いて、家でお留守番だ。

会社の屋上で、

同僚に昨日の事を話し、食事に誘われたが断った。なぜなら、あの子に会うためだ。

「おーい、いるかー？」
ちよつと大きめな声を出す。すると、
アー、アー、と鳴き声が返つて来て、一羽のカラスが翼をはためか
せて寄つて来た。

「おお、元気にしてたか？カア坊」

名前は簡単だがまあいいかな？程度で名付けた。カア坊との出会いは3ヶ月前、屋上で昼ご飯を食べようと思ひドアを開けると地面でカラスが暴れていた。いや、片翼が血に濡れていたから、猫にでもやられたのだろうか。それと首に紐みたいなのが巻いてあり苦しげに鳴いていた。
それを助けたのが今に至る。

カア坊は聞き上手で、私の話を聞いてくれる。

「私、彼氏と別れちゃったんだ」

アー。

「どうしようかな？」

アー？

「カア坊、私ね。彼氏を盗られたんだけどね？私って、そんなに魅力がないのかな？」

アー、アー！

翼を開く、それは否定だ。

「カア坊、あんたが人だったらあんたを恋人にしたいよ……」

「なら、遠慮なくいかせて貰うぞ？」

ん？ 後ろに誰かいたかな？後ろを向く。 いない…。

「カア坊、私、病院行った方がいいのかな？」

アー？

「いつもありがとね。はい、話のお礼のおにぎりよ
いけない。もう昼休み終わる。「じゃあ、また明日ね、カア坊」

ドアを閉めるとき、

「ああ、また明日、な」

とか聞こえたけど時間が無いので気にしない。

さあ、書類を全部片すか。

いつもはアリナ ンでチャージするが、今日は子犬の事があるので
早く終わらせるためにもとっておきのユ ケルの箱入りの奴でチャ
ージする。

どんと書類の山は減って行くが今は聞きたくない奴の声がする。

「課長う、これえどうやるんですかあ？」

一気にテンションが落ち。

「えー、どれかな？」

元恋人とぶりっこ後輩がいちゃつく。

イライラ。

「えつとおく、ここなんですけどおく」

イライライライラ。

「しょうがないな」

見ないぞ。私は見ないぞ。イラついてんのに今見たら間違いなく、ぶちのめしそудだ。イライラは仕事にぶつけた方が能率が上がる筈だ。

うん、そうしよう。

結果、業務終了時間、午後7時28分。

部長が涙ながらに感謝していたけど、私そんな大層な事したか？とりあえず。スーパーの袋を持って帰る。途中、ペットショップに寄ってグッズを買う。

電車に乗って降りたときには7時57分だった。

帰り道を歩いていると、ふと違和感を感じる。

腕時計は8時をさしている。

いつもならこの時間帯は結構人がいるはずが、誰ともすれ違わない。

風が吹いて缶の転がる音が響くほど静かだ。

呆然としていると缶の転がる音が止んだと思ったら、缶の蹴る音がした。

次の瞬間、缶がこちらに飛んできた。

「っ!!」

それを避ける。

「へえ、避けれるんだ」

「誰!」

すると、パーカーを着た15位の男の子が飛んできた。飛んできた、というよりは飛び出たの方がしっくり来る。

「おっと、失礼、お嬢さん」

「27でお嬢さんなんて呼ばれる事なんて無いと思ってたわ」
そう、返すと男の子は笑いを殺すように、「くくっ、怒らないんだね」

「…怒ってるわよ。で、何のようかな?早く帰りたいんだけど?」

「いや、この辺で甚平を着た男の人知らない?」

「知らないわよ」

「じゃあ、犬は見なかった?」

なんでこんな事聞くんだろうか?

「昨日、子犬は拾ったわ」

「そう、その子犬は俺ん所だから返してくれない?」

「お断りよ。あんなボロボロにしてちゃんと面倒見てないじゃない！」すると男の子は考える仕草をする。

「んー、ま、言ってもいいでしょ」

「なによ」

「俺は鬼なんだよ」

鬼？

とらのぱんつの金棒持つてるあれ？

そんな事考えていると、男の子の拳が飛んでくる。

私はそれを避ける。

よけて正解だった。男の子の拳はコンクリートを貫通していた。

「…なに、それ…」

馬鹿力つて言う次元じゃない！

「わかったでしょう？俺は鬼なんだ。だから、子犬の場所教えてくれない？」

普通なら屈している。が、「はあ、だから、お断りって言ってんでしょ…！」

ブレイクダンスの要領で地面をに手をついて、回し蹴りを二発くらわせる。

「なっ！ぐあっ…！」

相手がよろめくその内に足払いをかける。案の定転倒する。

「…いつつう。やってくれるねえ…人の分際で舐めた真似してくれ
るじゃねえか!!」

よし、怒ったならこつちのもんだ。

「鬼さんこつちだ！手の鳴る方へ」

「クソがあ！粹がつてんじゃねえ!!」

振られたばつかの女舐めんじゃねえ。

舐められっぱなしは性に合わないんだ。

アパートの方に走りながら考える。鬼の弱点を。 なんかないかな

？ 今あるのは、桃ジュース、スルメ、炭酸水、あと、もしもの時
用の催涙スプレー。

催涙スプレーしかないな…ん、待てよ？ 桃、鬼、餓鬼、日本神話、
黄泉平坂、打開策見つけた！

アパートの2階に階段を使って登る。よし、鬼も使ってる。逃げ道
は一つ位だ。

だから、これを使う。

プシューウウ

「目眩ましのつもりかあ？なめん…がつ、あ、ゲホ、ゲホゲホ」

催涙スプレーで時間を稼ぐ。

3階の305号室の前に確か和希君の木製バットがあった筈。バツ

トを拾い上げ、次に目指すのは、5階の507号室の前に置いてある酒井さんの日曜大工用品。そこに目指している間に炭酸水に塩を入れて思いつきり振る。ポケット塩持つてて正解だわ。鬼のいる階段とは別の階段を使う。

5階に行き大工用品を取った所でガシツと鬼に捕まれた。

「手こずらせたな！いたぶりまくって殺してやるよ！！」

「…それは、…い、いや…止めて…」

「助かりたかったら子犬の場所を吐け」

「…6階の602号室よ…」

「そうか、じゃあお前は用済みだな。…死ねよ」

「…やっぱりね」

「なんだと？」

「これでも飲んでろ！！」

一気に炭酸水の蓋を緩める。ブシッ！

勢い良く鬼の顔に炭酸水が当たる。

「ブハッ！」

よし、手が離れた。

そして逃げて目指すは屋上！

「はっ…はあはあ」

階段を一気に登る。

鬼が来る。

「まだ残ってて良かった！」
もう一度、プシューウウウ。

「来るってわかってたら、んなもんきくかよ！」
空になったスプレーを鬼に投げつけて登る。

最後の時間稼ぎはこれだ。

階段に大工用品に入っていた潤滑油を撒く。

「うおっ！がっ！」

案の定滑って落ちた。

屋上に着いた！

早く仕込んで置かなきゃ。

「ぜってーぶち殺すあのアマー！！！！」
バンっ！！ 鬼がドアを蹴破る。

「すー、はー、かかってきなさい！！！！」

てイザナギの命を追った。その餓鬼がたべるのを嫌がり逃げたのが黄泉平坂に成っていた桃だったという。

餓鬼に憑かれている人は、桃をたべると炎症が出るらしい。」

私が確信に至ったもう一つの理由が桃太郎の話だ。それで、鬼イコール桃嫌いと言う結論に至った。博打もいいところである。だが、当たっていたようだ。

「…テメエ、知ってたのかよ俺らの弱点を…」

「あてずっぽだけどね。さて、今度はこっちが攻める番だね」

「言つとくが俺らは傷だらけになってもほんのちよつとで治るぞ
!!!」

「だから、これを使う」

私がつっているのは釘バットだ。

「知ってる？釘バットってよくマンガで見るけど、本当にやると肉に食い込んでトンカチで打つ部分が釣り針の返しみたいになって抜けないらしいの」

「っ!!!やめっ!!!」

「…だから、貴方にはちよつといいでしょ!!!」

そこからは、あまりに凄惨な、一方的なたぶりだった。

抵抗出来ない相手に殴る。血が肉が見えていた。痛みにも悶え苦しん

でいる相手にただ殴りつける。

なぜか、涙が出た。。

一瞬かもしれない。でも私に取って永遠に感じた時間だった。

一見桃太郎は正しいのかもしれない。

だけど、自分たちと違うと言うだけで迫害されて。自分たちと違う未知のものが悪だと決め付けられて。

そんなひねくれた見方も出来る。

やがて、鬼は抵抗を止めた。

「…もう、殺せよ。なんでお前が泣いてんだよ…」

虚ろな目で見て言う。

私はバットを力無く捨てた。

そして、血だらけになった少年を抱きしめた。何故そんなことをしたか、自分でも分からない。でもそうするほうが良かったと思う。

「帰ろっつ、止めよっ、おいでっ」

涙しながら、抱きしめる力を強くしながら少年に言った。

「なんでだよ！！俺はお前を殺そうとしたんだよ！？なんでっ！！
なんでなんだよお…」

少年も泣く。先ほどの事から学んだのは、戦いの無情さ。

儂さ。不毛な命の奪い合い。

少年は私の胸でむせび泣いた。

タララ〜 オニガナカマニナツタ!…ふざけてみたけどどうしよう…(前書き)

さて、東京行って来て更新遅れました。アハハ…許してください
え!

楽しんで頂けたら嬉しいです。

タララク オニガナカマニナツタ！…ふざけてみたけどどうしよう…

少年はよく見ると美形でした。

赤毛でおしゃれ短髪でした。

血だらけで顔に血しぶき付けてフード付きのパーカーはズタズタになっていて、ほとんど裸です…。

必死だったとはいえさすがにやりすぎた。

「……怪我、大…丈夫かな？…アハハ…ハ…」

「んあ？ああ、ほれ、見てみ」

傷口を近づけられる。

うわ、かさぶたはがしてる。痛そう…つかまた血が出る…よ？

「何、これ…」

かさぶたをはがした所は怪我なんてまったくなくなっていた。

「これが俺の能力なんだよね。とはいっても、あんたに桃をくらわされたからもう一つの能力は使えなかったけどね」

てめえ、あらぎ君か…むしろしぶちゃんか…？

いや、あの二人は怪我そのものが無くなってたけど。

まあ、それは置いて、さて、どうしましょうか？ この惨状…

血しぶきが飛び散った床、ひしゃげた屋上のドア、そして和樹君の

名前入りの血だらけになった釘バット……、和樹君ごめんね……そして酒井さん……潤滑油ばらまいてすいません……釘使つてすいません……どうしよう、この後……

「なあ……」

少年が呼ぶ。

「何、今これの片付けについて考えてるんだけど……ほんとどうしよう……」

「いや、あのさ、もし良かったらでいいんだけど……居候させてくれない?」

ワット? (ネイティブ風に)

「ごめん、もう一度」

「養つてくれない?」

直球にしたな……。

もう一度、ワット? (ネイティブ風に)

もう一回、ワット? (ネイティブ風に)

「何故……!」

「いやー、へましちまった訳じゃん? 俺」

「知るかよ!」

「へました奴はボスに消されるんだよ! 本当に、後生だから助けて

くれ!!」

「勝手に消されるや…」

「おねがいますからだすげでください…」
濁点つけまくんなよ…そして泣くな。

「わかった。この惨状どうにか出来たら考えてやる」

「マジ！やるやる!!」態度変わりすぎだぞ？少年…

パン!!

少年が手を叩く。

あれ？床の血しぶき消えてる。

少年のはついたまんまだけど。

おお、和樹君のバットが傷ひとつ…いや、釘一つとしてない。
酒井さんの釘も潤滑油も元通り。

ドアも元通り…っておい！

「お掃除終了つと。これで養ってくれるんでしょ？」

「なによそれ！」

化かすにもほどがあるわ！

「これはうちの旦那の能力なんだよ。裏仕事に使われてる奴なんだけどあらかじめかけておくと、そこでなにがあるつと解くと元通りになるんだよ」

「知ってたらもつと別の事頼んだわ…」

「まあまあ、約束したんだしお願いしますよ」笑顔で揉み手すんなむかつくから。

「…最後に一っただけ聞かせて、あんたあの子犬をどうするつもりだったの？正直に話さない」

脅しを含めて問う。

「…ウチの旦那の命令ですよ。…その子犬は元は犬神だ。しかも實力は単純な力比べならウチの旦那すら叶わない奴なんですよ。不意をつかれてそんな姿になってるんでしようけど本来の姿はでかい狼なんだ。名は 緋牙ひがつつう犬神なんだ…」

パンパン。私は手を叩く。

「はいはい、わかったわかった。とりあえずうちにきなよ。……ハア、なんでこんな事になったんだろ……」

「よっしゃ！あ、ついでにあんたの名前は？」

少年は明らかに喜ぶ。

「人に名前を聞くときはまず自分からでしょ？まあいいわ…明日香よ…」

疲れる。何か疲れる。

「俺は雅鬼みやまだ！よろしく！」

字面だから分かるけど当て字なんだな。

つか順応早いな！私らさっきまで殺し合いまで行ってなかったっけ？

「行こうか…」

「おう！」

場面変わって(緋牙side)

早く帰ってこないかな…ご主人。

俺は緋牙、ご主人に拾われた妖怪だ。

ご主人はいい人なんだが俺は心配である。 あいつが俺を探して来てご主人に危害が及ぶかもしれないからだ。

ガチャ…

お、帰ってきたようだ。

「ただいま」

さて、甘えに行こうか。

そんでもって明日香side

「ただいま」

子犬に向けてのただいまだ。やはり家に誰かいるのが嬉しい。

ダダダダダッ！

子犬が廊下を走る。

ダダダッ！タンッ！！

助走からのジャンプ。

ガッ！！ヨジヨジ…

服に捕まって器用によじ登る。

チュツ。ペロペロ… 鼻でキスしたのち唇を舌で舐める。

「お邪魔しま〜す……って何やってんですか…犬神の旦那…」
ビクッ!! ササッ
少年を見て驚いて慌てて降りよつとす。
ガシッ!!
捕まえられる。

「ねえ〜、雅鬼君」(猫なで声)

「は、はい!!」

「これって元に戻せる?」

「できます!!」

「ジャア、オ・ネ・ガ・イ」

ヒョイ、

「だ、旦那すみません!!」

少年は子犬の背中を叩いた。

ボンッ!!

煙があがる。

「てめえ、俺の正体ばらしやがったな!？」

「すみません！すみません！俺はまだ命が惜しいんです…！」

パキリ　ポキリ

「ヒイツ…！」

煙が晴れる。

そこから出てきたのは、クリーム色の髪、赤い目、程よく引き締まった身体、甚平を着た20歳くらいの美青年、だが、「さて、言い残す事は？」

「待って下さい！ご主人…！」

「そう、素敵な音を奏でてあげる…」

「まっ、待って…」

ヒュン！

ドゴツ！　バキッ！　「じきり、じき…」

「ひいひい……。旦那が手も足も出てない……。降参しといてよかった……」

シュツ、

ズツパアツ、ガンガン！

「ぎゃあああー!!」

それは、残酷すら当てはまらない、慈悲なく、憐れみなく、惨^{むじ}たらしい有り様だった…と少年・雅鬼は言う。「黒兎の旦那…あんた、敵に回しちゃいけない奴を引き当てたよ…」

「何か言った？」

ニコリ

「何もありません!!」

「そう…」

グチャア、グチャン!

ヒュン!

ビシャアアツ!!

「ゆるしてくださいいいっ!!…!!…!!ご主人っ!!…!!…!!ヒギヤアアア
!!…!!」

ゴシヤア!!…!!

話し合いです…めんざくわい…

「はあ、私は風呂入って寝るわ…」

ひとしきりに話を終わらせて風呂に向かう。

「あ、そうだった！服出してあげるからあんたはこっちおいで」
ほとんど裸の雅鬼を呼ぶ。裸と言っても所詮15歳。その程度に欲情するほどじゃないし。さらに言えば弟いるから見慣れてる。

「分かった」

とりあえず弟が来たとき用の服があったからそれを渡す。

「血が付いちゃってるからあんたから先に風呂にはいりなさい」

「あ、ああ」

「使い方分かる？解らなかつたらお姉さん…一緒に入ってあげようか？」

ちよっとおちよくってみる。

「なっ！？ば、馬鹿にしてんじゃないねえ！！それに今はこんなだけで俺はお前より年上だ！！」
うくく、

「へえ、とてもそう見えないんだけどねえ」

あえて挑発する。

「嘘じゃねえぞ！なんならみせてやつからな！」

もう無理…！！

「あはは、冗談よ！反応がおもしろく…」

トンッ

「て…」

え、あれ？なんで両手捕まえられて床に縫い付けられてんの！私。

「馬鹿にしゃがって、……どうしてやるつか？」

目の前には裸の美形が私を押し倒している。赤毛のオシャレ短髪、つり目、実用的な筋肉質の身体、歳は私と同じくらい。

「あれは動きやすいからああなってただけでこっちが本来の、化けた姿のまんまだ。」

「いやー…、さっきのは冗談よ、冗談」

15歳から25位になっていらっしやる。「ふーん、冗談、ねえ。

まあ、俺もなめられるのいやだからな…これであいこだ」

「うひゃっ…」

レロンと首を舐められた。

「もっと色気のある声出せよ」

また舐められる！と思っていいたら何か嫌な感じが…

「なあ、雅鬼…」

ビクリと身体を驚かせた後、油の切れたブリキ人形の如く後ろを振り向く私を押し倒した雅鬼。

「旦那、いや、これはその…」

バカな！！あいつはぼろ雑巾みたいにズタズタにしたのに！！

「なんで！あの状態からどうやって再生したの？」

緋牙はにっこりと笑い、「子犬に戻ってご主人と一緒に風呂入るうと思つて！！」………最悪すぎる！！

「雅鬼青年、あれはもともとあんな性格だったのか？」

「いやー、旦那は独り身と言つか孤独だったから、たぶん甘えを斜め25度位間違えたんじゃないかねえか？」

「うわぁ…」

イライラと鋭い視線を感じているのだが、私。

「いつまでやつてるんだ？俺はそんなに気は長く無いぞ？」

「ああ！…どきますすどきますす！」

バサ。

「」「」「あ」「」

唯一の服である布切れが落ちて雅鬼青年すっぱんぽんになってしまったわけで……当然アレも見える。

「あ、おっきいね。へへ、こっちの毛も赤なん「わー！わー！見んなー！！」」

「そうですねー！！そんなのより俺の方が大きいですー！！」

「比べんなー！！てか、あんた本当に女か！？」

「私は女よ！ついでにヴァージンよ！」

「じゃあなんでそんなに落ち着いてんだよー！！」

「弟で見慣れてるから。最近彼女してくんだよね、あいつ」

「知るか！」

「ご主人の初めて……貰っていいですかー！！」

ガスッ！げんこで頭殴る。

「ギャンー！！」

「いい訳ねえよ！ああ、風呂はいりなよ。適当に服選んどくから」

「わかった。…あんたにはかなわねえよ……」

そそくさと風呂場に行く。

「で、緋牙君であつてた？」

「はい！」

「なんで逃げてきたの？」

緋牙がおちやらけた空気を潜ませ代わりに真面目に私を見る。

「……………解りました。簡単に言えば不意打ちされたんです」

「そう、で、本題に入るけど屋上にあんたいたわね？」

美形の目が見開く。

「なんでそれをつ……………！！！」

「気付いてたわよ。雅鬼は気付いて無いようだけどね」

「知つてたら何で助けを求めないんですか！？」

そんな事ぬかしたので思いつきりげんこで殴った。

「痛っ！！！」

「バカ犬が、ちゃんと考えて物言え」

「え？」

涙目でこちらを見る。

「第一にあの時私はあんたを知らなかった、第二に雅鬼と同じ奴か

「どうかわからなかったから、第三に一般人かもしれない奴だったら巻き込む訳にいかないから、おわかり？」

「あ…、考えてなかったです…」

緋牙の頭を撫でてやる。

「まあそれはいい」

「はあ、もつと撫でてくださいい」

顔をふにやりと崩す。

「が、なんで助けなかった？」

頭皮に爪を立てる。

「いてて！そっそれは…その…」

「身元バレて怖がられて見捨てられるのが怖かったから？」

びくりと緋牙の身体が揺れた。

「なんで分かるんですか…俺が…それを恐れてたこと…」

「んー、昨日の寝る時かな。拾われて戸惑ってたら呼ばれて一緒に寝れるのが嬉しかった、というところかな？」

「う…」

「あとあの子がなめてたから私が勝つって分かってたでしょ。そう

ねえ、「あの程度なら危害の部類に入らないな…。まあ一応見張って置くか」とか

「降参です…」

「後、いなくなったのは釘バットでメッタ殴りにしてる真最中で、帰って来て雅鬼を見て驚いたのは私が殺したと思ってたからでしょ？」

「…「ご主人は覚おぼですか？」

「違うわよ。私の体験と予想に基づいての推論よ。後、私に子供を殺めさせようとしたのは何故かしら？」

「人間はそれくらいやるでしょう？俺の時だってそうだった、散々飢えさせられて、殺されて、勝手に奉られて、拳げ句邪神だの言われて、誰も来なくなっただから殺す位はやると…」

「自分を基準にして誰にも聞かないで自己完結しないでよ、うざい」

「うるさいっ！…！！あんなになにが解る！！あんなに俺のなにがああっ！！」

緋牙の身体がぶれ、私の目の前に現れたのはでかいクリーム色の赤い目をした狼だった。

「へえ、さっきまでは飼い犬みたいなふりして、自分を否定されたら噛みつこうと、いやはや、妖怪は訳分からんね」

「黙れ!!」

「うるさい」

「あなたは俺を分かってくれると思ってたのに!!」

「だから自己完結すんなよ……」

「うるさい!!」

「じゃあ一応聞くけど、なんで断ったの？雅鬼から聞いたわよ、あんたを不意打ちした相手、人間を滅ぼすんでしょ」

「それはっ!!」

「本当に憎かったらそっちに付くでしょ？本当は分かってるんですよ。人間そうゆう奴ばっかじゃないって」

「……………違う……」

「違うない」

元に、人型に戻っていく。

「なんでっ！俺は殺されなけりやならなかったんだ？どうして俺は見捨てられたんだ？ずっとわからなかった……」

ポロポロと涙がこぼれている。

「ねえ、私の好きなヒーリングホラー漫画書いてる人が、こう書い

「ただ」

緋牙を抱き寄せて耳元で囁く。

変わらぬものが あるというなら 大きな 力の勝手に ふりまわされるもの 今も 昔にも 弱く 小さい いのち ばかり…

【著作・池田さとみ作・辻占売5巻29話カワボタルより抜粋。】

「今の世の中にも犬を平気捨てる人もいるのよ。捨てられたら保健所で殺されるの…」

「だからあんたを拾ったのもなにがあっても責任を取る覚悟で拾ったの。それこそあんたの人生背負う覚悟でね」

「気まぐれで拾ったわけじゃないから、あんたの命狙ってる？ だったら私がなんとかしてあげるからあんたも私を信用しなさい」

どんな表情してるかわからないが、泣いて私の胸が濡れるのと、嗚咽、そしていつの間にか腰に回された手が強く私の服を握っていた。

話し合いです…めんどくさい…（後書き）

いや、池田さとみ先生はヒーリングホラー界の巨匠なんだ！だから私は著作権問題に発展しようとも池田さとみ大先生を敬いますよ！

さて、反省

明日香、姉御というか漢になっています…

緋牙、性格があやふやになっています…

雅鬼、こちらは口調が変わってしまっている…

呆れないで見てくれてありがとうございます。

まさかのキス！…わめくな鬱陶しい…（前書き）

えろくなっちやいました！けど、わたしはギャグをえらんだ。読ん
でくださってありがとうございます。

まさかのキス！…わめくな鬱陶しい…

風呂から雅鬼青年が上がったので緋牙をなだめて私は風呂に入ろうとした。……………入…ろうとしたんだけどな…。

今現在、すっぱんぼんになった緋牙を洗ってます。

いや、大事な部分にはタオルかかってますよ！？

何故こんな事になったかというところ、こいつがいい歳してぐずって…ねたんです…。

回想

46

「風呂上がったぞ。…何やってんだ」

バスタオルを腰に巻いてもう一つのバスタオルで頭拭いてる雅鬼が私ら見て言う。

2枚もバスタオル使いやがって！

洗って干すの私だぞ！？

「ん？ちよつと泣き虫君をね」

まあ、抱きしめてるからねえ。

「泣いて…無いです…」
ズズツ

私の胸に顔を埋めて頭を振る。

泣いてなかったらぶん殴ってる。

「はあ…、それで服はどこだ？」

「ああ、今持って来るからね。緋牙君、ちよつと離してくれる？」
胸に顔埋めて頭をイヤイヤと振る。

「嫌でっ、ずっ…うっ…」

くっ…!!…わざとだったら本気でぶん殴ってる。

駄目よ私、泣いてる人を殴るようなことしちゃ!

根気よく、根気よくよ!

「ごめんね？離してくれないと雅鬼君の服出せないの？」

それでもイヤイヤと頭を振る。

うっ…、胸が涙で濡れて気持ち悪い…

「いつやあ！！やだ…やだやだ！」
こいつ子供返りしやがった！

「あーもう！！解った！私は勝手にやるから！！」

服を持って来るため立った。

スクツ、

緋牙もそれに合わせて器用に胸に顔埋めながら立つ。
くっ、こいつ……。

構わないことに決めた。

服を置いてある部屋に行く。

スタスタ、

スタスタ、

その間にも緋牙は腰を^{かが}屈めながら後ろ歩きで体制をキープしている。

私が屈めば、膝を折って地面に付く。

服を取り立ち上がれば、折っていた膝を伸ばし立ち上がる。
腰に手を回してるからバランスをとりやすいんだろう。

その間ずっと、「やだやだっ！やだー！」「うっ…ぐすっ…、
「ずっ、ずびー…」、「うわあああん！…うえっ…」

駄々こねるわ、人の服で鼻かむわ、泣いてえずくわ、疲れるわ…。

「はい、これが服ね」

渡してる間もずっと泣いている。

「…おう、すまねえな…。気にならないのか、えー、それ…」

ついにそれ扱い。

「いいのよ、放つといてるから」

「びゃあああ！びゃあああ！…びゃあああ！…！…うえっ…びゃ
あああ！…」

放つとく発言でさらに泣き出す始末…。

「あの旦那が…、なんか見てられないな…」

「気にしないでいいのよ。あ、野菜ジュースあるけど飲む？」

「嫌でも気になるだろ…。桃と大豆以外ならいけるぞ」

「んー、ちよつと待ってて、確認するわ。あ、テレビゲームあるか
らやっついていいよ」

「じゅ…じん…むじっ、ヒック、じ…ないでえ…！…」

「適当に選ぶぞ。…音楽系ばっかだな…後はアト エ系だな…」

「あれ、アト エ系やったことあんの？」

「ああ、マーからヴィ ラートまでやったな」

「へえ、じゃあ、アーラ ドシリーズやりなよ、面白いよ。はい、桃と大豆入ってない野菜ジュース」

「私風呂入ってくるわ」

「おう、わかった」

我が家の風呂はまあ一般的な足がある程度伸ばせる浴槽だが所詮ある程度、つまり中途半端な体育座りできる程度である。

「お風呂入るから離してくれる？」

コクンと頷いて顔を上げる。

泣いて顔が真っ赤になっている。

泣きすぎだのだろう、ぼーっとしている。

「よし、向いっついで待っててね」

ガシッ、

ん？

「この手は何かな？」

「…しょ…は…る」

小さい声で何か言っている。

「ごめん、もう一回言っ「一緒に入る！！」

子供返りもここまできたか…。

「はあ、わかった。一緒に入って上げる」

「ほんとうに！！！！」

うわ、キラキラと輝くイケメンの笑顔を見てもさっきの行動見てたから全然ときめかない！

「ウンウン、ホント、ホント、ダカラモウナクナ」

私、今すっげー棒読みだろうなあ。

「わかりました！！」

ひまわりみたいな笑顔を浮かべてるからたち悪い。

そんで今現在〜

わしゃわしゃ、

むっす〜

「一緒に入るって言ったじゃないですか…」

「だから一緒に入ってるじゃない」

「服脱いで下さいよ〜！ずるい〜」

「はいはい、シャンプー流すから目を閉じて」

私の今の格好は合羽かっぱ来てプラスチックのお風呂掃除にはく靴をはいて洗っています。

緋牙は私にされるまま、座り台に座って私に背中を見せている

しかしこいつ、髪サラサラだよ。私のヘアケア代いくらしてると思ってたんだよ！

痛んでないし枝毛すらない。

シャワー、

泡がみるみる流れ落ちる。「あの、ご主人…」

さっきまでは子供っぽかったが今の発言は真面目だった。

「ん、何？身体洗うからねー」

「俺はあなたに拾われて良かったと思ってる」

「アハハ、照れちゃうわねー、恥ずかしいじゃない。背中行くわよ」

「ちなみにご主人、俺はね」

「んー？」

「ご主人の事が好き、ですよ…」

「あー、私もよー」

適当にあしらうに限る。

ゴシゴシ、

「俺に本来の姿に怯えずに対等に話してくれて嬉しかった…」

「いやいや、結構びびってたわよ？」

ゴシゴシ、

「ハハハ、正直ですね、ご主人は」

「まあ、飼うって事は向き合わなきゃいけないこと事だつて私は思うからね」

「そうですか…」

「昔、動物飼いたいって駄々こねて、

買ってもらって大切にしていたんだけどね、籠を洗うために陶器のおわんを被せて外に出してただけその間に近所の野良猫に殺されちゃった事があってね…。初めてだったから結構ショックつけてね。それ以来、私は動物を飼う資格なんてないんだと思ってた…」

「……………」

「けどね、昨日の今日でそこまで好きって言ってくれるんだから嬉しいわよ」

「そうですか、良かった…。俺と結婚してくれるんですね！」

んん？

「ちょっと待て。いつそんな話になった!？」

「だつてご主人、俺の事好きだつ言つてくれたじゃないですか！」「あれれ？あつれー？」

「私の好きは親愛だが？」

「酷い！俺の好きは愛なのに！」

「なにが、酷いつ！！だ！このお馬鹿！」

「ううー…、俺の初恋奪つておいてその言いぐさ…もう、怒りました。強硬手段です！覚悟！！」

ガバツ！

ダン！！

急に押し倒された。

「うわっ！！痛った…ちよつとなにすん」その口もらったー！！」
チュツ

「ふん…ん…」

こいつ、舌入れやがった！これが、ディープキスか…。

元彼氏のあいつとはプラトニックでフレンチキスくらいしかしていない。

チュ…クチュ…

プハツ！

「あーもう！！ご主人は俺を見て！！見てくれないなら……」

「もっと激しくして俺だけしか見れないほどにしてやるから……」

耳元で囁かれる。

「ちょっと！待っ「待たない」。それ！もう一回突撃」

チュウウツ

「ん…ふう…ひゅっ…」

レロ…クチュ…クチュ…

うわーうわー、私今急激に大人の階段のぼってるっ！

いや、もう大人だけどそっち方面にはてんで縁がなくて…、てあれ？そっちってどっち！？アハハ、もうわかんない！普通こうゆうのって、「やだっ…！！なにも考えられない…」ってゆづのじゃない！？

確かにこいつ上手いよ！？

でも、私考えまくってますよ！？

明日香、極度の緊張によるパニックを起こす。

明日香は混乱状態だ！

あ、緋牙ってまつげ長いな。へえ、まつげまでクリーム色なんだ。目が真っ赤でルビーとかそうゆうのみたいね？ 髪の毛がちょっと掛かってるくすぐったいな。

ダメだ…。私、初ディーブなのにアホな感想しかでないな！
「あっ…ふわっ…！」

ふわってなんだ私…！！

…チュ…レロツ…クチュ…

響くいやらしい水音、漏れる吐息、心音が速くなり欲情に駆られた男の目…。

ああ、でも私はちょっとしか疼いてないんだよ！今日は雅鬼君とバトったんです！

疲れが勝ってるんです！性欲より睡眠欲が勝ってるんです！

クチュ…

ツウとよだれが私と緋牙の口に伸びている。

「…ご主人。もっと、していいですか？」

私は迷わずこうした。

「ふんっ！！」

ブン！

「はっっ！！！！」

バタン

私は迷わず股間に蹴りを放った。

ピクッ…ピクピク

思いつきり力の限り蹴ったからか、痙攣して気絶している。

まあ、プラスチックの靴履いてたしね。

「あー、重い。よっこらせ！」

ドサッ

ずるずる…

私に被さっている緋牙をのけて引きずる。

我が家の風呂は洗面所とくっ付いているのでそこに連れてく。

あー、気絶させたから重い！

タオル取れて生まれたまんまの姿だけど、いろいろ見えてるけど！！
んなもん気にするか！私はさっさと風呂入りたいんだ！

さっきの押し倒された時、服がビチョ濡れになったんだよ！

いい加減胸も気持ち悪いし！

私は通常よりもでかいバスタオルを三枚出して緋牙を三重に簀巻すきにする。

これによし。

その後、さっさと風呂を済ませた私はかなりへとへとになっていた。

ああ、雅鬼の布団敷かなきゃ…。

よし、敷いた。後は寝かすだけ…。

ああ、今日からこんな辛い日々を過ごすのか…。

さらばとは言わない…いつの日か…、お前達と戯れるよ。だからその日まで少しお休み、音ゲー達よ…。

「雅鬼、布団敷いたからもう寝な」

「えー、今メルのアト エ2年目に突入したんだから、あともう

「一時間だけやらしてくれよ」

なに子持ち家庭に有りがちなやり取りしてんだよ！

「いいから寝なさい！」

「はあ…、わかった。だからセーブだけさせてくれ」

順応しまくりだなこいつ…。

「よし、できた」

パチンとゲームの電源を落とす。

「一応、冷蔵庫にご飯あったからそれ食べな」

「俺は今ところ腹へってないぞ」

「そうじゃあ私だけで食べるわ、寝室はあっちだから、お休み」

「ああ、お休み」

「そっいや、緋牙の旦那はどうした？」

「……はあ、洗面所には近づかないでね……」

「……分かった……」

その一時間後に私は就寝。

さらにその三時間後に簀巻きされた緋牙が起きて魚のように跳ねて
暴れ、ついには尺取り虫のように這いながら私の布団に入って来た
らしいと、朝起きて驚いていた私は雅鬼青年にそう教えられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4204z/>

やっちまったよ。私...妖怪みたいなのを拾いました。

2012年1月2日11時52分発行